

## トマト萎凋性病害診断の傾向と診断のポイント

本県のトマトおよびミニトマトにおいて重要な萎凋性病害である萎凋病、かいよう病、青枯病は、おおむね6月上～7月上旬に診断依頼件数が増える傾向にある。これら3病害の診断のポイントは下記の通り：

- ・萎凋病：下葉からの緩慢なしおれ、葉の黄変・黄赤変、維管束褐変
- ・かいよう病：下葉からの緩慢なしおれ、葉の脱水様斑・巻き上がり
- ・青枯病：頂部からの急激なしおれ、維管束褐変および乳白汁液の溢出

また、診断を確定する場合には、ナス科萎凋性病害診断培地やイムノクロマトキット等が活用できる。

### 1 背景

平成20年度から令和2年度まで病害虫防除所に診断依頼された実績では、野菜病害は27%（67件）がトマトおよびミニトマトで、診断結果は萎凋病（根腐萎凋病を含む、以下併せて「萎凋病」とする）、かいよう病、青枯病が多い。

これら3つの病害は症状や発生時期などが類似するなど、現地での診断確定が難しい場合が多い。そこで、診断実績からそれぞれの病害の発生の特徴を整理し、診断のポイントを示す。

### 2 病害虫防除所における診断時期

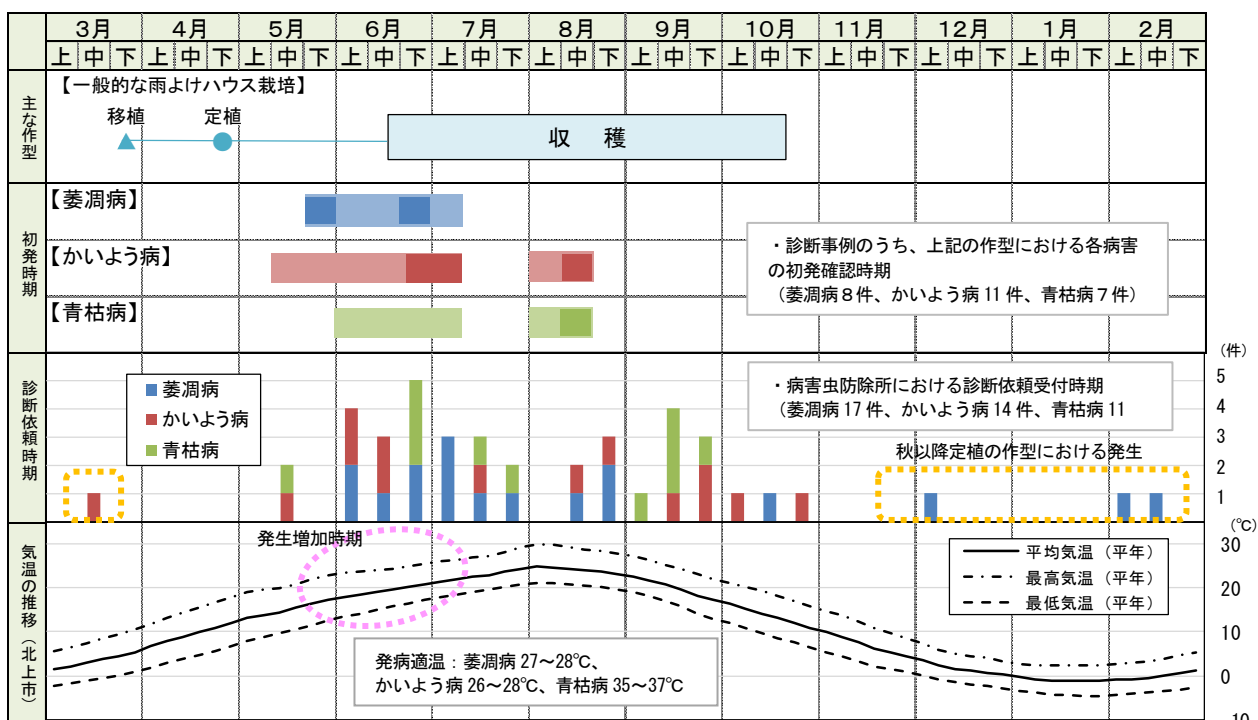


図1 トマト・ミニトマト萎凋性病害診断時期 (H20～R2 病害虫診断結果より)

- (1) 一般的な雨よけハウス栽培において、萎凋病・かいよう病・青枯病の症状が顕在化するの、おおむね6月上～7月上旬頃である。この時期の最高気温（北上市）は23～26℃程度で、ハウス内はこれらの病害の発病適温となり、症状が助長されると考えられる。
- (2) これら3病害は6～9月に継続的に診断依頼があり、栽培期間を通じて発生がみられる。
- (3) また、12～3月にも促成栽培等の作型において萎凋病やかいよう病の発生がみられる事例もある。

### 3 診断の実施

#### (1) 診断方法について

ア 図2「トマト・ミニトマト萎凋性病害の診断のポイント」を参考に、予想される病害に応じて、ナ

スコ萎凋性病害等診断培地（Fo-G1 培地、SMCMM 培地、原・小野培地）を用いて診断する。

イ かいよう病と青枯病は、市販のイムノクロマトキットでも診断できる（Agdia 社：Cmm、Rs）。

ウ 抵抗性の品種や台木等を使用している場合は、発生している病害をある程度絞り込むことができるが、診断に際しては作業感染や穂木の発根による感染等にも留意する。

エ 診断に供するサンプルは、症状がみられてから間もないものを用いる。

(2) 上記により判断ができない場合は、病害虫防除所に診断を依頼すること。

	萎凋病	かいよう病	青枯病
圃場全体・株全体の観察（しおれの特徴）	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・下葉からのしおれ、やがて黄化・枯死</li> <li>・しおれの進行は緩慢</li> <li>・葉の鮮やかな黄変または黄赤変</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・下葉からのしおれ、やがて退色・枯死</li> <li>・しおれの進行は緩慢</li> <li>・作業による感染では、畝内で連続した株でみられることが多い</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・頂部からの急激なしおれ（青枯症状）。発生初期は、葉の退色等は見られない</li> </ul>
茎（維管束褐変等）	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・維管束褐変は比較的濃い</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・維管束褐変は比較的薄い</li> <li>・末期には茎内部が粉状となり空洞化する場合がある</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・維管束褐変は比較的濃い</li> <li>・多くの場合、茎断面から乳白汁液が溢出する</li> </ul>
その他の症状等	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・発生初期には、片側の小葉のみが黄化することが多い</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・葉脈間の脱水様斑、小葉縁からのしおれ・表面への巻き上がり</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・乳白汁液の溢出。茎切片を水浸すると、白濁する</li> </ul>

図2 トマト・ミニトマト萎凋性病害の診断のポイント